

体をひらく、
心をひらく

第十二回

●野口整体気・自然健康保持会 指導補佐
金井とも子

「転落」から「充実」へ



板長に突然の異動命令

日本は戦後の長い年月、経済活動に主軸を置き、経済大国になりました。しかし、お金によって何でも手に入れ、多くのことが可能になる世の中を作り上げた一方で、身体の働きに思いやることなく、命の時間を浪費してきたとも言えます。お金さえ出せば、ほとんどが事足りることに慣れてしまうと、お金で買えない心の使い方が不自然となり、気持ちに空

洞が生まれて、自分探しが始まります。ところがそれは、不自然に固めた自分の心に向き合う方向ではなく、前世療法やヒーラーの世界といった、自分の見えないところを形にして知りたいという方向に行きがちで、結局は心の空洞は満たされずに、右往左往することになってしまうのです。

野口晴哉先生は、「一時間生きたことは一時間死んだこと」と、日々、身体に気持ちを向け、それを使いこなして生きることの大切さを説いておられますが、このような時代だから

こそ一人ひとりが自分の内面を大切にし、自己を「確固たる心体」に育ててほしいと思います。

これからお話しする星野さん（仮名）は、かつて熱海の大ホテルの板場をすべて任せられていた人でした。ホテルの板場は、板長を中心に回っています。月に一千万円近くの食材の仕入れを自分の采配で行うことができる絶大な力を持っています。それは、板場については経営者でも手出し口出しはできないと言われるほどでした。

彼は、十九歳で板場の世界に入り、三十七歳で板長になりました。板長になるまでには、使い走り、鍋洗いといった「追廻し」と呼ばれる下積み時代の経験し、その後、煮方、焼き方を十年、二十年と行い、ようやく「花板」となって「親方」とも呼ばれる板長の座に就くのです。職人の世界の上下関係は非常に厳しく、上には絶対に服従です。彼もまた、そのようなにして板長になっていきました。

ところが彼は、板長の立場をわずか三年で手放さなければならなくなりました。ホテルの閉鎖に伴い、同系列のゴルフ場の食事処へ異動することになったのです。四十歳といえ、板長として、男として、最も勢いのある時期です。最も自分を発揮できるときに突然、一皿千円、二千円の食事処へ移らなければならなくなった彼は、まさに頂点の座から転げ落ちるような感覚だったに違いありません。彼のプライドは傷つき、戸惑いが心の中を交差していたはずでした。

さんざん迷った揚げ句、彼はゴルフ場の食事処の責任者となりました。最初の二、三年は、下で働いている人と何かにつけて噛み合わず、道場へ来ても不満の言葉ばかりが出てい

ました。

わき起こる苛立ちと葛藤

そんな彼も、整体との出会いによって、自分の身体を模索しながら、自らを育てていったのです。もともと非常に真面目な気質で、修業を積み重ねてきた身体ですので、指導に対して頭の先で捉えるようなことはなく、私との会話も日々の自分と繋げてきちんと捉え、解決しようとしているのが感じられました。ただ、修業してきた腕（技術）が発揮できる職場ではないことと、食材の質が違うことで、彼はわき起こる苛立ちと闘いながら仕事をしなければいけなかったのです。「今まで身につけたものを捨てるのが、もう一つの修業だ」といった話をよくしていました。当時を振り返りつつ、彼は次のように話してくれました。

「ゴルフ場の食事処というのは、言ってみれば定食屋です。ホテルだとも意見が通ったのにゴルフ場ではグリーン優先で、食事は二の次、三の次。そういう環境に身を置いて、これまで培ってきた自分のプライドが許さなかった。そんな気持ちをはか変わったことをすることで埋めようとして、仕入れも新しいものをどんどん増やしていきました。お客さんや従業員のことなど念頭になく、自分が満足することばかりを考えていたのです。その結果はボロクソでした」

その土地のことも、食事処で何が求められているかといった勉強もせずに新しい職場に就き、おまけに不満がいっぱいの彼でしたので、料理についてもうまくいかず、職場の中で

も孤立感を持っていました。

若い頃ころから贅ぜい沢たくな一品を作るために修業してきた彼です。ホテルでの刺身の一品に相当する値段で定食を作らなければどうにもならないという現実を突き付けられ、自分が変わらなければならぬところへ追い込まれていったのです。

最初の頃、彼の目はひたすら他人に向けられていました。自分に従ってくれない従業員を責めていたのですが、ふと、ホテルの板場では、上の板長や先輩の気持ちは汲むことができていた頃のことを思い出し、その目を従業員に向けてみたのです。そうしているうちに、彼は、従業員たちの気持ちは受け取れるようになってきたと言います。そして、ホテルで長い間追求し続けてきた仕事への姿勢が、新しい職場では「我」にすぎなかったことにも気付いていきました。

ホテルの刺身の一品の予算で定食を作れと言われて、最初は「そういう金額でできるか」と反発を抱いたことも、仕入れ先の変更によって可能なことを知り、やがてホテル時代に築いたものと違った目線で見えるようになり、それまで見えていなかったところが見えてきたと言います。

「道場に通い始めた頃盛んに言われた『捨てなさい』という意味が、やっと分かってきました。周囲に受け入れてもらえないものを思い切って捨ててみると、気持ちに楽になり、周囲から私自身が受け入れてもらえるようになったのです。

今思えば、ホテルにいたときの自分は別人でした。いつも目をぎらぎらさせて怒鳴り散らし、若い子にはそっぽを向かれ、周りの人間をどれだけ嫌な気持ちにさせたかしれません。あのままホテルにいたら自分は高飛車な嫌な人間になってい

たと思うのです」

彼は、「整体指導と活元運動を通して、心が穏やかになり、翌日も『よし、やろう！』という気になります」と語ってくれました。

職場の環境や条件といった外側に向いた気持ちを一度徹底して自分の内側に向けてみることで、気持ちの空洞を自ら埋めることができるのです。その結果、星野さんは、人間的に一回りも二回りも大きくなりました。

彼の個人指導をしてきた夫の金井省蒼は、「味覚を追求してきた長い日々があつたればこそ、彼は生き方を変えることができたのだと考えられます。五感のうちのどれか一つでも大事にしないと、こういった感覚も磨かれない。『一芸は百般に通じる』と言われるように、一つの感覚を大切にするとすべてに通じるのです」と言います。

星野さんも、これから人間としての成熟期を迎えていきませんが、この感覚を大切に、生きることの楽しさ、苦しさも十分に味わいながら生きていってほしいものです。



体をひらく、
心をひらく

金井とも子 かない・ともこ
一九三九年（昭和十四）生。野口整体 気・自然健康保持
会 指導補佐。七五年活元コンサルトン取得。九一年よ
り整体指導補佐として整体指導を求めて道場に訪れる人た
ちの相談役を務める。現在は活元指導の会も行っている。
ホームページ <http://www.ne.jp/asahi/kishizenki/>